

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'86夏

—第135回大学共同セミナー—

● **ナショナリズムと国際性**

——内村鑑三と新渡戸稲造を中心に——

● 昭和60年度 教育プログラム白書

● 昭和60年度 業務白書



Plain living and high thinking

No.103

ナショナリズムと国際性

—内村鑑三と新渡戸稲造をめぐる—

国際基督教大学大学院教授 武田 清子

ナショナリズムの多様性

はじめに、ナショナリズムという言葉が、どういう意味を持っているか、概念規定をしておきたいと思います。ナショナリズムは、国家主義、国粹主義、国民主義、民族主義など複数の日本語で表現されています。このことは、日本では、ナショナリズムに多様な理解があることを示しています。

第一の国家主義ですが、ナショナリズムには、「家」という概念は含まれていないが、日本では、明治以来の忠君愛国の国家主義、「家」の原理の拡大としての国家への忠誠、国体ナショナリズムなどを含んでいると言えるでしょう。この国家主義は、英語では *family state ideology* (家族主義国家のイデオロギー) と呼ばれることにも、それはよく示されています。第二の国粹主義は、明治20年代には、下からのナショナリズムとして、日本の文化や伝統のエッセンスを重視する意味で使われていたのが、今では反動的右翼の独占物のようになっていています。第三に、国民主義と言うと、政治体制や時代によって、多少のニュアンスの違いはありますが、個人の自由と責任に立脚した民主的な国を意味すると言えるでしょう。最後の、民族主義は、たとえば、戦後、「アジアの民族主義」などと使われるように、民族自決の原則に立って、帝国主義的な植民地支配からの独立を意味しています。以上のようにナショナリズムの概念には、いろいろな要素が錯綜しており、そこには多様な課題が内包されていることがわかりま

②

す。以下、近代日本の生んだ偉大な思想家であった内村鑑三と新渡戸稲造が、近代日本の抱えていたナショナリズムの課題にどのような取り組み、今日の私たちにいかなるメッセージを残しているかについて考えてみたいと思います。

日本民族の文化的主体性

内村と新渡戸のナショナリズムの特徴の一つは、日本人の主体性を明らかにすることにありました。この問題には、個人の主体性と民族の文化的主体性の二つの側面があります。内村は、神の前に立つ罪人として自己を発見することによって、強靱な個性的、人格的主体を確立しました。彼は、近代日本において最も強烈に「自己とは何か」を明確にした人と言えます。それに対して、新渡戸の場合はキリスト教の光をあてながら、日本の伝統的文化的懐から段々と人格的な主体を掘り起こして、こうとするアプローチが見られます。

文化的主体性、あるいは日本民族としての主体性については、内村は『代表的日本人』の中で、「私が日本人であるとは何か」という問題を考え抜いています。彼は、キリスト教のプリズムを通して、キリスト教を接木する台木を、日本文化、日本の歴史の中の人間像の内包する普遍的価値に見出そうとしている。彼は、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人を取り上げ、正義に立つ国、「働かざるものは食うべからず」の原理での社会改革、倫理的価値に立つ経済、人間

を超えた真理に基づく教育等々、日本文化の懐にある普遍的・人類的価値に、日本民族の主体性の根を発見しようとしています。

新渡戸の『武士道』も同様な問題意識を持っています。彼は、国際社会の一員として、常にインターナショナルな観点から日本を見てきましたが、世界に通用する独自の道徳的体系を持ったものとして、日本文化を捉えているようにしています。彼にとって、「武士道」は日本文化や日本思想のエッセンス、日本人の精神の中核をなす道徳体系のシンボリックな呼び名でしたが、彼はその中から、ある普遍的な価値を掘り出そうとしたわけです。

このように、明治の思想家の中でもキリスト者は、分析的に自己確認の作業をしながら、日本の内発的文化や価値の積極的要素を捉えようとしている点で、非常に独自な存在だと、私は思います。

ところで、内村の愛国心はよく「預言者的愛国心」と呼ばれています。預言者とは、神の言葉を語る人の意味ですから、預言者的愛国とは、神の義に立った愛国です。自分の国を手放しに善しとするのではなく、神の義の立場から国が正しくあるよう努めることを通して国を愛するわけです。彼は、これを別の表現で「二つのJ」(JesusとJapan)とか「楕円の原理」とか呼んでいます。内村は、特に日本に対する愛国心がとても強かった。彼の中で、時には「JapanのJのほうが重いのではないかと思えるほどです。しかし、天皇の教育勅語に宗教的な礼をすることを思い留まらせたのは、もう一つのJでした。彼は、本当に恋愛感情かと思うくらい愛を二つのJ



に対して持ち、その二つの「J」が、火花を散らしているようなところがあります。白樺派や大正ヒューマニズムの人たちのように、日本を飛び超えて、自己から世界主義、人類主義へいくのではなく、「私を日本、日本を世界、世界をキリスト」に、という方法で、日本という国を貫いてキリストに繋いでいく点が、非常に独自だと思います。

開かれたナショナリズム

新渡戸は、「我、太平洋の橋とならん」と言いましたが、彼は、日本とアメリカの間の橋というだけでなく、異質文化の間に相互理解の橋を架け、他国人に日本文化が、日本人に他国の文化が理解されるように通路を作るというヴィジョンを持っていました。新渡戸はこれをリベラル・エデュケーションの普及を通して行いました。自分を開くことがなければ、他者を理解することはできないにもかかわらず、人間は、自分に執着し、閉じた自己のエゴイズムの虜になっている。人間は、その意味では、非常に不自由な存在ですが、そこから自分を解き放つのが、リベラル・エデュケーションです。この点、新渡戸のナショナリズムは、内村の預言者的ナショナリズムに対して、「開かれたナショナリズム」、あるいは「橋を架けるナショナリズム」と言えるでしょう。

このようにして、内村と新渡戸は、同じように日本人としての文化的主体性を持って、深く自己の問題と取り組んだわけですが、二

人にはそれぞれ強調点の置き方に違いがあります。それは、両者の信仰の質や性格の違いからきていると思われれます。内村の信仰は、罪人の頭としての私が、キリストの執り成しによって救われる贖罪の信仰であり、これは義に重点をおく戦闘的信仰です。それに対して、新渡戸は、赦しに強調点を置く寛容なクエーカー信仰の持ち主でした。どんな人の中でも、内なる光として神の種が宿されていると信じ、あらゆるものの中に神の約束を見、愛による和解に重点が置かれています。内村の神は父のようですが、新渡戸の場合は、非常に抱擁的な母のイメージです。また、内村の場合には、一つの原理で突き進む宣教者として否定や対決の面が強いのに対して、新渡戸は、人間の中に含まれた可能性を引き出し、育てて行く教育者として、非常に抱擁的です。このように二人の信仰や性格には大変面白い対照が見られ、両者から指導を受けた人の中から優れた人物が輩出しているのも、お互いが他を補う側面を持っているからではないかと思えます。

21世紀へのメッセージ

最後に、内村と新渡戸の現代へのメッセージとは何かを考えてみたいと思います。21世紀は多元主義の時代であるという人がいます。諸民族が政治的独立ばかりではなく、文化的な独立を主張する多元主義の世界では、自己を絶対化して他の文化や価値を拒否する時、自己主張と自己主張のぶつかり合う混沌

状態が起こってきます。ある民族の文化の中の非人間的要素と普遍的・人類的価値とを見分けて、どのように自分のアイデンティティを明確にするか、そして個別民族の独自の文化が「開かれた価値」としてどう人類に貢献するかということが、非常に大きな人類的課題になってくると思うのです。

内村鑑三と新渡戸稲造は、欧化主義の波が押し寄せていた近代初頭の日本の中で、いち早く日本文化の積極的・肯定的面と見分け、日本文化が持っている道徳的・精神的価値において日本の主体性を明確にしました。自己の独自の文化を分析的に再検討し、自己批判と自己評価を通して、その中から普遍的な価値を内包するものを掘り起こしていったのです。このような文化的主体の問題を明確化するナショナリズムとそれを超えていく明確な展望を持った自己認識の方法は、日本だけではなく、これからの世界において非常に大きな意味を持つのではないかと思います。

私は、内村や新渡戸を読むたびに、新しいメッセージとチャレンジを受けます。それは、彼らが、自己を超えたもの（神）の光のもとに、自らの存在をかけて、「自己とは何か」と問うたことが、歴史の流れを超えて、私たちに、なお生き生きと問題を提起してくれるからではないでしょうか。（文責・編集者）

▼全体講義 ナショナリズムと国際性

——内村鑑三と新渡戸稲造をめぐって——

国際基督教大学大学院教授 武田清子氏

▼セクシヨン演習

A 内村鑑三のナショナリズム

明治学院大学法学部教授 渋谷 浩氏

B 終末論と近代日本——内村鑑三の再

臨思想を中心に——

東洋大学文学部教授 泉 治典氏

C 新渡戸稲造における憂国心と国際心

大阪市立大学文学部教授 佐藤全弘氏

上15校

◇

わが国の代表的キリスト者である内村鑑三と新渡戸稲造の生き抜いた時代は、日本が西欧列強の圧力に抗して、「ネーション」としての統一を達成しようとした時代であった。彼らは、他の明治の思想家と同様に、極めて強い国家意識を持っていたが、決して自国の伝統的文化の（固有性）や（特殊性）を絶対化する偏狭なナショナリストではなかった。彼

第135回 共同 学ミナ 大セ

——主題——

ナショナリズムと国際性

——内村鑑三と新渡戸稲造を中心に——

期 日
'86.3.13~15

D 国民経済の形成をめぐって

明治大学政治経済学部教授 田村光三氏

中央大学商学部教授 山下幸夫氏

▼運営委員

(略) 田村光三氏

(略) 山下幸夫氏

▼参加者 43名(内女子16名)

中央(6)、慶応義塾(5)、早稲田(4)、

東京、津田塾、東京女子(各3)、筑波、

学習院、国際基督教、明治(各2)、東

京理科、東京国際、武蔵、ハーバード、

東京女子短期(各1)、その他(6)、以

らは、かえって近代日本の依って立つナ

ショナリズムの危険性をいち早く見抜

き、「将来の日本の進路を憂慮して、預

言者的な批判を加え、真にわが国が進む

べき方向を的確に示した」(田村氏)。

内村と新渡戸のナショナリズムは、決

して国家や民族の自己偶像化のための手

段ではなく、キリスト教を媒介としなが

ら、あくまで、日本文化に内在する個別

的価値を普遍的・人類的価値へと接続し

ていくための（支点）であった。今回の

セミナーの課題は、民族とその伝統的文

化の優越性を無条件に前提とする「閉ざされた」ナショナリズムに対し、内村と新渡戸の信仰と思想を道標みちしるべとしながら、「ナショナリズムと国際性」という一見相反した概念が、どのように矛盾なく両立し得るのか」(山下氏)を説明することであった。

21世紀の国際社会を展望した時、「将来の日本がどのような道を選択しようとしているのか」、世界各国が注視していると言っても過言ではない。今、国際社会における日本の姿勢と役割が真剣に問われ始めている。近代日本の方向舵とも言うべき内村と新渡戸からの（メッセージ）を読み取りながら、現代に生きる日本人としてのアイデンティティを模索し、これからの日本のとるべき進路について、熱心な討論が行われた。

◇

今回のセミナーは、過去に合同セミナーを共に運営された「実績」に立つ田村、山下両氏のご発案によって実現した。講師には、両氏を含めて、内村の創始した無教会主義キリスト教の熱心な信仰を持つ、渋谷 泉、佐藤の各氏をお招きした。「非常に明確な筋道で進められるセミナーに感動した」との参加者の感想に示されるように、大変高密度のセミナーが展開されたことにに対し、ここに改めて感謝の意を表しておきたい。参加者は、アメリカからの2名の留学生を含めて43名とやや少なめであったが、キリスト教主義の学校関係者、牧師、無教会をはじめ

めとするキリスト者も多く、「中心的秩序とでも言うべきものへの信頼感とより高い価値を指向しようとの姿勢がはっきりと認められた」(後掲「感想」参照)充実した三日間であった。

◇

セミナーの第一日、開講の挨拶に立つた田村氏は、「明治維新から日本の近代化の過程を振り返る時、内村と新渡戸の生き方は、現代に生きる私たちへの問いかけである。彼らの生き方をしっかりと見つめて、その現代的意義をつかみとってほしい」と、セミナー全体を眺望する視点を提示された。

続いて、セクシヨン演習の予告篇となる共通セッションが行われ、各講師によって、ナショナリズムの問題の持つ厚みと奥行きが浮き彫りにされた。はじめに、内村と新渡戸のナショナリズムについて、渋谷、泉、佐藤の三氏が以下のように、問題の所在を提示。

「内村の無教会は、宗教改革の論理の徹底と同時に、日本民族独特の信仰者共同体であった。この点でどうしても日本というネーション、国民的特性の問題につきあたらざるを得なくなる」(渋谷氏)。「内村は、『私は日本のため、日本は世界のため、世界はキリストのため……』と言っているが、彼のイエスと日本への愛は、『世界』を媒介にしている。『世界とは一体何か』を解く鍵が、黙想思想である」(泉氏)。

「明治のキリスト者は、自分の救いだ



開かれたナショナリズムを模索する——真剣な
討論が行われた全体集会

けではなく、国と共に救われることを意図していた。新渡戸のナショナリズムを捉える視野には、諸文明を超えた絶対的、普遍的なキリスト教があった（佐藤氏）。続いて、山下・田村両氏が、経済史的視角から、ヨーロッパにおけるネーションの成立過程を辿りながら、ナショナリズムの多様性を指摘。「元々 nation は、自由で平等な市民の連帯に支えられたものであり、それは政治機構としての国家 (state) とは区別される。……(愛国心)とは、自由で平等な社会を守ってゆこうとする意識と責任であり、国家を愛する(愛国心)とは別物と考える必要がある」(山下氏)。

「ナショナリズムには、制度としての国家が上から意図的に国民意識を植え付けてゆく権力主義的なものと、住民の中

から生み出されるものが、自ら一つの固まりに組織化されてゆく民主主義的、反権威主義的なものとの相互に反する二つの側面がある。同じナショナリズムと言っても、その国の置かれた国際環境や社会、経済の発展段階に応じて種々の姿をとりうる点に注意しなければならぬ」(田村氏)。

◇ プログラムの二日目は、午前中のセクシオン別演習に引き続き、昼食後に武田氏による全体講義が行われた。氏は、近代日本と西洋文化の相剋と土着化の問題に独自の観点から照明をあて、近代日本思想史の分野に新たな地平を切り拓いてきた。講義の内容は、前掲(2)3ページ)の要約を参照していただくことにし、以下では、講義後、氏を囲んで開かれたシンポジウムの模様を紹介しておく。

ナショナリズムと言えば、一般的には、「閉じられたもの」との理解が先行してしまい(渋谷氏)、「現代日本には、(愛国心)を民主主義のシンボルとして強調できないような政治風土がある」。シンポジウムでは、内村と新渡戸のナショナリズム観を足場にしながら、こうした底の浅いナショナリズム理解を打破すべく、活発な議論が展開された。

「現在、理想や思想一般に対する信頼感が急速に失われつつあり、利己的個人主義がはびこっている。その中で、自己愛を変形・拡大した形のナショナリズム

が押し寄せてきたらひとたまりもない。『真理のためには、国家が減びてもよし』とする神の義に立つ内村のナショナリズムは、このエゴイズムの固まりのようなナショナリズムと対決する時、非常に大きな力を持つと思う」とのフロアーからの指摘は、「各自が砂粒のような個人」(武田氏)へと解体してゆくかに見える現代

の日本社会にあつて、極めて重要な問題を提起しているように思われた。ナショナリズムを「盲目的な自己愛」へと変質させないためには、「自国の長所や美点ばかりを取り上げるのではなく、愛国には、自らの歴史的な過ちを理解し、その責任を負い抜くことも含まれている」(山下氏)との醒めた自己認識が不可欠である。内村の言った「形のない個性喪失者(an amorphous universal man)」に陥らないためにも、各自が「情熱なき情熱」(渋谷氏)を持って、自らのアイデンティの基盤としての文化的土壌を理解してゆくことの大切さが改めて確認された。

◇ 最終日の全体集会では、前半の演習レポートに続き、参加者を中心として、日本の近代化の意味や天皇制など、近代日本思想史を読み解く上での核心的問題を中心軸としながら、真剣な討論が行われた。参加者からは、「さまざま質疑応答を通して、これまで気づかなかった問題点が提示され、今回のセミナーの主題の深さと広さに改めて驚かされた」との

感想が寄せられた。二時間半にわたる報告と議論の過程を通して明確になったことは、結局、「閉じられたナショナリズム」と「開かれたナショナリズム」を比べてゆく上での分岐点が、「自分を愛するがゆえに国を愛する」のか、「真理を愛するがゆえに国を愛する」のかという立場の差にあることである。

内村は、「イエスと日本を較べて見て、孰れをより多く愛するか、私には解らない」と述べる一方、「人間を神にするような国家は滅びる」と断じた。また、新渡戸は、「われわれは、自分たちがナショナルであつてはじめて、インターナショナルになりうる……。もし人が、真に愛国者になりたいのであれば、同時に国際主義者にならなければならない」と語っている。彼らの「日本」に対する態度は、常に「愛と嫌悪」、「肯定と否定」の二重の感情に彩られている。彼らは、キリスト教を自己の立脚点としながら、その生涯を通じて両者のあいだを激しい緊張をもって生き抜いたのである。

二泊三日の学びを通して、明らかになったことは、日本人としてのアイデンティの確立とは、日本の伝統的・民族的文化に自らを排他的に同一化するのではなく、かえって、これに批判的に関わることを通して、日本人としての〈固有の経験〉を、より普遍的な価値基準から(人類の一つの歴史的经验)として位置づけ直すことである。言い換えれば、それは、武田氏の分析にある通り、

日本の精神的土壌に内在する諸要素において、いづれを「否」と宣言し、いづれを擲き上げ、普遍的価値へと誘導、培養してゆくかということである。その意味で、内村と新渡戸の試みは、近代日本における一つの大きな思想的実験であった。彼らは、自分たちの後をうけて働いてくれる若い人たちに、自らの見出した真理を託した(佐藤氏)。今回のセミナーが、参加者一人一人の生き方の(舵取り)となりえたとすれば幸いである。

参加学生の感想から

●(中心的秩序)への信頼感を回復して

久し振りに真剣な言葉のやりとりを経験しました。まやかや媚び諂いのない討論それ自体がいかに人間を高めるものなのかを肌で感ずることができたこと、これがこの度のセミナーでの最大の収穫物であったと言えます。討論への参加の仕方は、当然のことながら人により実にさまざまで、主張する内容においても、それぞれに個性的な光を放ちつつ観

点の決定的な違いをその内容に含むものでした。自らの行動の拠って立つところとして、ある者は新渡戸稲造のいう sociality に近いものを構想していたようで、またある者は「子供の頃夕暮まで遊びほうけたあの路地裏」つまりミハエルのいう祖国を、あるいはさらに、内村鑑三のごとく神の義を譲ることのできぬ価値として考えていたのかも知れません。

しかしこのような意見の相違にもかかわらず、私にとって忘れがたい出来事となったのは、今回のセミナーに参加された人たちの中に、なにかしらの中心的秩序とでも言うべきものへの信頼感とより高い価値を指向しようとの姿勢とが、紛うかたなくはっきりと認められたということなのです。意味が喪失し、あらゆるものが不確かなものに思えてくるこの世界のただ中において、ニヒリズムへと押し流されることなく、否むしろ、それを押し返そうとするならば、他ならぬこの世俗内にとどまりつつ一定の価値に忠実たらんとする決断以外には、はたして私たちに残された道はあるのでしょうか。

あの身をひきしめるほどの冷たい風と時ならぬ雪とがこのごろ無性になつかしい。ふと目を閉じてセミナー・ハウスでの討論のあとをふり返ってみたりしました。私たちは多摩の丘で三日間をともに過ごし、知的な挨拶(対話)が楽しい習慣となりました。物言わぬ大地もそこで人と人との出会いが生まれたとき特別な意味を持ち始めるように、私たちに

とっては、あの丘が、いまやすでに、かつて英詩人テニソンのうたったところと異ならぬのです。
あの丘にのぼりて
眼下にひろがる
風景に見れば
そこここに息づく
友のやさしい想い出

(中央大学商学研究科博士3年・上野継義)
(Lit Memorial より私訳)

●知的空間に身を置いた
春休みの三日間

「愛国心」という言葉を口にすることすら抵抗を感じてしまう私たちですが、今回のセミナーは、内村鑑三、新渡戸稲造を通して、一見矛盾しているかと思われる「ナショナリズムと国際性」が、実は相互補充的なもので、決して相剋し合うものではないのだということを感じさせてくれました。

大学の最終学年を目前に控えた3月中旬、大いなる期待をもって参加した私にとって、多くの先生方や仲間との出会いを含め、大変有意義な三日間となりました。本来、勉学を第一義とすべき知的空間であった大学の形骸化が危惧される今日において、二泊三日の間ひたすら一つのテーマについて考え、討論することのできる大学共同セミナーは、今さらながら勉学に励むことが最も尊いのだということを確認する絶好の機会となりました。雪の降り積もる中、学部、専門の異なる学生が、

さまざまな視点から熟っぽく討論する姿は、知的空間としての大学の復活を求める学生が少なからずいることを物語るものであり、大変勇気づけられました。大学セミナー・ハウスが、大学再生の支柱となることを心から願うと同時に、セミナーに参加することによって、より多くの学生に大学とはいいたい何かを真剣に考えてもらいたいと思っています。(慶応義塾大学経済学部4年・久保文克)

●アンケートから

目的意識を共通にする学生が集まり、その内容を専門とする講師を中心に、非常に明確な筋道で進められるセミナーに感動した。すべての大学における講義がこのセミナーのようなものであれば、日本の青年の思考は大変革するであろう。大学には思考を強いるクラスが余りにも少ない。(筑波・医4年)

参加者がそれぞれの考え方をしっかりと持っていることに驚いた。いろいろな問題について真剣に考え、自分なりの考えを持つ人間になりたい。今度、セミナーに来る時は少しでもそういう人間に近づいていたいと思っただ。大学の中で仲間とはこういう問題について考えることがまずなく、僕にとってとても大切な場所だと思った。(早稲田・商1年)

四つのセクションが各々の専門性を保ちつつも、その域をこえ、互いに話し合えて、すばらしかった。(津田塾・国際関係1年)

昭和60年度 教育プログラム白書

昭和60年度は、表1に示すとおり、大学共同セミナー4回、大学院共同セミナー1回、大学合同セミナー1回、国際学生セミナー1回、大学教員懇談会1回、計8回のプログラムを実施した。これらの企画に当たられた共同セミナー委員会、国際プログラム委員会、大学教員懇

談会企画委員会および各プログラムの指導教授諸氏のご協力に対して、この紙面を借りて謝意を表する次第である。

また本年度は、開館20周年を記念して各種の企画がたてられ、当ハウスの20年の歩みを意義深く祝うことができた。表中にあるプログラムの他に、記念シンポ

ジウム、式典、記念講演会が開催されたことを記し、共同セミナー委員会を中心とする関係諸氏のご尽力に改めてお礼を申し上げます。

◇

表2-①③は、大学教員懇談会を除いた学生対象のプログラム計7回の参加状況である。ゼミ単位の参加形態をとる大学合同セミナーと、個人参加の他のプログラムとを区別するため、表中、大学

合同セミナーの参加者を内数で()内に示した。

まず参加者総数は三六六名で、前年度より一四二名減少した。そのうち大学共同セミナー全4回の参加者数は二〇一名で、各回平均は五〇・二五名となり、昭和40年7月に発足した大学共同セミナーの歴史の中で最少を記録した。

因みに参加者の多い上位5校は、早稲田(53)、芝浦工業(37)、東京、慶応義

昭和60年度業務白書

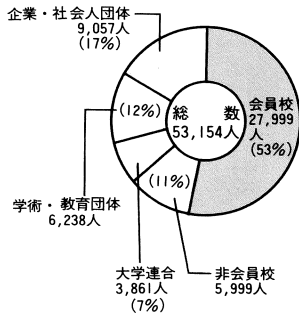
●年間宿泊利用者五万三、一五四人

開館以来二〇年目、昭和60年度も、大
学セミナー・ハウスは協力会員校を中心
とする大小さまざまな合宿研修グループ
を迎えた。宿泊利用者数は、延べ五万
三、一五四人(月平均四、四三〇人)、グル
ープ数は一、一一九(同九三)であった
(表1)。対前年度比二二六人増、54年度
(国際セミナー館が年間稼働開始)以来
七年連続五万人台を維持した。
なお、開始以来(二〇年九ヵ月間)の
宿泊利用者数は延べ八九万八、二七七人、
グループ数は一万九、五三三に達した。

●グループ別の利用状況

「会員校」(協力会員校は準会員校を含

〈図1〉 利用グループ別宿泊延人数



●利用グループの態様

大学関係の利用の大半は、いわゆるゼ
ミ合宿で、宿泊日数では一泊が圧倒
的に多い(平均宿泊日数は一・六五泊)。
他に学科・クラス単位の集会、学内の学
際的集中講義、各種課外活動、大学の枠
をこえた全国的な研究会など多様であ

「非会員校」を加えると七〇%と
なるが、「学術教育団体」にも教師・学
生の参加が少なくないので、大学関係者
の利用は八〇%に近い(図1、表1)。
なお、参考までに、会員校大学五四校の
うち、本年度比較的使用の多かった一五
校を表示した(表2)。

●年間の稼働率五五・六%

宿泊延人数を(収容定員二七〇人)
の稼働率に換算すると、年間(稼働日数
三五四日)の平均は五五・六%(前年度
五四・九%)となる。ハウスの利用状況
は、大学特有の事情により、月によって

国際的な集会では、外国人留学生を含
む諸集会のほか、計六つの訪日研修グ
ループを迎えた。

●交歓プログラム

季節の諸行事、夕食時の交歓会、地元
茶道教師一門の奉仕による遠来荘での茶
道教室などが、利用者の生活の中に組み
入れられ、喜ばれている。本年度は三九
回の交歓プログラムが実施され、一九八
グループからの四、〇六四人が参加した。

(前頁「教育プログラム白書」へ表2へつづき)

【②学科別参加者数】

	男	女	合計	比率(%)		
文学部	4	15	19	65 (42)	17.8	
史学	3	2	5			
哲学	4	3	7			
教育学	5	2	7			
芸術学	1	1	2			
その他の人文科学	3	3	6			
法学部	24	6	30	143 (44)	39.1	
政治学	48	7	55			
経済学	19	16	35			
国際関係学	4	8	12			
社会学	4	7	11	110 (8)	30.1	
理学部	11		11			
工学	79	7	86			
農学	7		7			
医学・歯学・薬学	1		1			
その他の自然科学	4	1	5	2	2(2)	0.5
家政学		2	2			
その他	32	14	46	46(14)	12.5	
合計	256	110	366		100.0	

()内は内数で女子

【③学年別参加者数】

区分	男	女	計	比率(%)
1	13	14	27	7.4
2	21	17	38	10.4
3	38	22	60	16.4
4	89	26	115	31.4
大学院	63	17	80	21.8
その他	32	14	46	12.6
合計	256	110	366	100.0

大きく変動する(図2)。概して年度の
後半は低く、特に学年末試験をひかえた
一月は、本年度も二〇%を下回った。利
用の少ない月、週末を除いた平日の利用
の促進をはかり、全体としての稼働率を
高めることが課題である。

()内は前年度数

〈表1〉 利用者別宿泊人数・ゼミ回数

	ゼミ回数	比率(%)	宿泊延人数(人)	比率(%)	1団体平均実人数
会 員 校	613 (657)	54.8	27,999(28,672)	52.7	29 (28)
非 会 員 校	124 (170)	11.1	5,999 (6,397)	11.3	33 (32)
大 学 連 合	42 (45)	3.7	3,861 (4,179)	7.3	42 (46)
学 会 ・ 教 育 団 体	88 (108)	7.9	6,238 (6,568)	11.7	33 (34)
社 会 人 団 体	252 (210)	22.5	9,057 (7,122)	17.0	23 (22)
合 計	1,119(1,190)	100	53,154(52,938)	100	29 (27)

〈表2〉 会員校利用状況

順位	校 名	ゼミ回数	順位	校 名	宿 泊 延 人 数	順位	校 名	在籍学生100人あたりの宿泊延人数
1	東京都立	59	1	早 稲 田	1,791	1	東 京 都 立	55.0
2	中 央 大	50	2	慶 応 義 塾	1,754	2	杏 林 大	47.4
3	早 稲 田	45	3	中 央 大	1,699	3	津 田 塾	30.3
4	東 京 大	39	4	東 京 都 立	1,535	4	お茶の水女子	27.8
5	慶 応 義 塾	33	5	立 教 大	1,080	5	順 天 堂	21.5
6	法 政 大	26	6	青 山 学 院	976	6	東 京 薬 科	21.2
6	青 山 学 院	26	7	東 京 大	863	7	杉 野 女 子	18.8
8	東 京 学 芸	24	8	東 京 学 芸	816	8	東 京 学 芸	16.3
9	明 治 学 院	20	9	津 田 塾	776	9	国 際 基 督 教	15.6
10	立 教 大	19	10	駒 沢 大	765	10	淑 徳 大	13.8
11	駒 沢 大	18	11	法 政 大	750	11	東 京 医 科 歯 科	13.4
12	明 治 学 院	16	12	東 京 理 科	613	12	武 蔵 大	11.1
12	習 志 院	16	13	学 習 院	563	13	立 教 大	8.9
14	上 野 大	14	14	杏 林 大	525	14	慶 応 義 塾	8.8
14	東 京 理 科	14	15	明 治 大	495	15	学 習 院	8.5

(注) 1. 準協力会員校は含まない。
2. 通信教育スクーリング学生の宿泊数は含まない。

寄 書 贈

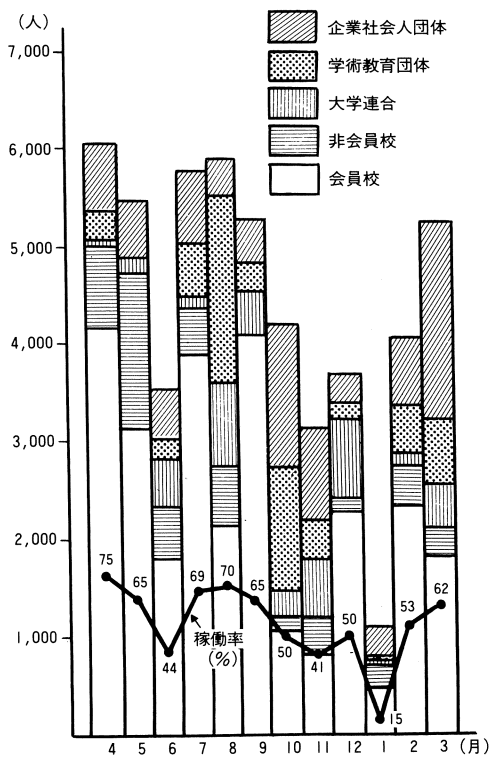
'85年6月
'86年5月

「I・D・E」No.262～272
国際関係・地域研究教育の実態報告
民主教育協会殿
「国際協力」6～3月号 国際協力事業団殿
「The Changing Functions of Higher Education」大学研究ノーム 63
嶺山道雄殿

「恩恵の継承」 新井 明殿
「世界史のなかの日本占領」 法政大学殿
「アジアの友」4～7月号
「安楽死論集」9「長く暑い夏の日」「社会学論叢」91～95「生と死の境」「老人問題の今日的課題」 アジア学生文化協会殿
「学生相談室レポート」11～12 笠原正成殿
「寺内正毅内閣関係資料」上・下他 東京都立大学学生課殿
「古い木馬」 中川秀恭殿
「ワイルドの時代」「サロメと世紀末都市」 井村君江殿
堀江珠喜殿

広島大学教育研究センター殿
新井 明殿
法政大学殿
アジア学生文化協会殿
笠原正成殿
東京都立大学学生課殿
中川秀恭殿
井村君江殿
堀江珠喜殿

〈図2〉 月別・利用グループ別宿泊延人数と稼働率



「現代詩研究」314～315 現代詩研究所殿
「研究者・研究課題総覧一九八四年版」全7巻 日本学術振興会殿
「心学五倫書」の基礎的研究」他2冊 学習院大学殿
「金融経済」212～217 金融経済研究所殿
「新しき村」7～86年4月号 安達義明殿
「文化交流の理念と対策」国際交流」41 国際交流基金殿
「拝啓 マッカーサー元帥様」 袖井林二郎殿
「核戦争の危機と人類の生存」 福島要一殿
「海外の日本人」小事典「映画小事典」 福島要一殿
「東京女子大学メサイア30年」 エン・スタウンダード石油株式会社広報部殿
メサイア三十周年記念行事委員会殿
「英語教師入門」 奥田夏子殿
「生活時間」男女平等の家庭生活への家政学的アプローチ 伊藤セツ殿
「出会いと摂理」 鈴木 皇殿
「MME研究ノート」1～22 放送教育開発センター殿
「武器としてのことば」 鈴木孝夫殿
「現代ナショナリズム」 板垣興一殿
「わが青春のサッカー」 堀江忠男殿
「年表に見る八王子の近代史」 かたくら書店殿
「一般教育学会誌」12 一般教育学会殿
「はちおうじの教育統計 昭和60年度」 佐倉六郎殿
「ハイン研究」第1・3・5・9巻 八王子市教育委員会事務局殿
鈴木和子殿
「中央大学百周年記念論文集」 中央大学商学部殿
「早稲田フォーラム」49 早稲田大学総長室広報課殿
「国際交流の新展開を求めて」 大学基準協会殿
「村田大造著作集」10 佐藤岩子殿
「エントロピー入門」 杉本大一郎殿
「キリスト教年鑑」86年版 杉本大一郎殿
「良心の囚人―陳玉璽小伝」キリスト新聞社殿
「新しい教育の原理―いま学ぶことの意味を問ふ」 尾形 憲殿

第61回理事会・第42回評議員会

'86年3月28日/銀行倶楽部

〔出席者〕

(理事) 中川秀恭、飯田宗一郎、三宅彰、鈴木皇、立野晴夫

(評議員) 小川芳男、長幸男、瀬元美知男、井出源四郎、喜多勲、岡宏子、久留都茂子

委任状による者 理事17名、評議員74名。 (敬称略)

◇

理事会・評議員会合同会議のため、中川理事長が議長となり審議が進められた。議案はそれぞれ立野専務理事より詳細な説明が行われ、すべて承認可決された。

▽評議員人事に関する件

学長交代により成蹊大学長瀬元美知男、埼玉大学長竹内正幸の二氏の新任。朝倉孝吉、須甲鉄也の二氏の退任。大妻女子大学長内藤登三郎氏の死去。

▽昭和61年度事業計画・収支予算案に関する件

収支予算案については別掲の予算書のとおりである。なお、予算編成に当たっては、会員校会費・利用料金等ともに据え置きとし、事業収入の面で利用率57%を目標に増収をはかることとし、利用者延人数は60年度実績の一、〇〇〇人増に当

る五万四、〇〇〇人を見込んだ。

事業計画については①講堂、ゲストルームの冷房化、②ユニット宿舍群の内装及び洗面所の改善・増設、③人件費の効率化、間接管理部門の機械化・合理化、④開館20周年記念募金の達成、を重点施策とする。

▽開館20周年記念募金に関する件

4月から本格的に募金活動を開始するに伴い、募金依頼先の企業の紹介等の協力要請がなされた。

第62回理事会・第43回評議員会

'86年5月30日/銀行倶楽部

〔出席者〕

(理事) 中川秀恭、小山五郎、飯田宗一郎、村井資長、村山松雄、田中郁三、鈴木皇、立野晴夫

(評議員) 隅谷三喜男、大東百合子、岡宏子、加納六郎、北郷薫、久木田賢志、鈴木隆雄

委任状による者 理事15名、評議員74名 (敬称略)

◇

▽評議員人事に関する件

学長交代により芝浦工業大学長柳井久義、立教大学総長浜田陽太郎、筑波大学長阿南功一、駒澤大学長桜井徳太郎の四氏の新任。宮地杭一、高橋健人、福田信之、桜井秀雄の四氏の退任。川又克二氏

の死去。

▽役員人事に関する件
浜田陽太郎氏の理事新任。村井資長、高橋健人の二氏の退任。以上のほか任期満了に伴う理事二名、監事二名の再任。理事長、館長、専務理事、常務理事七名の再任。なお村井資長氏は開館以来の關係者として顧問に委嘱された。

▽準備協力会員校加入に関する件

東京都立医療技術短期大学、文教大学女子短期大学の加入

▽昭和60年度事業報告・収支決算に関する件

事業収入は、予算に見込んだ利用者延人数を一、八四六人下廻り、五万三、一五四人にとどまったが、施設収入で予算を上廻り全体としては一四一萬三、〇〇〇円の増収となった。支出については、諸経費節減をはかり、約一、五〇〇万円の赤字となった。詳細は別掲の「収支計算書」に示すとおりである。なお、監事から、60年度の会計・業務とも適法の適正に処理されており、特に問題はない、

との監査報告がなされた。

昭和61年度 第1回国際プログラム委員会

'86年5月12日/私学会館

〔出席者〕

広野良吉、三輪公忠、菊地靖、熊田禎宣、庄野克房、山沢逸平、M・W・ステイール、立川明、長谷川三千子、渡辺昭夫、宇佐美滋、小野沢正喜、竹田いさみ、小松諄悦、溝田勉、藤沢勝好

(次頁上段につづく)

(敬称略)

昭和61年度経常部収支予算書 (61.4.1~62.3.31)

収入の部		支出の部	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
基本財産運用収入	194,000	人件費	133,959,000
事業収入	162,188,000	施設管理	27,222,000
宿舍収入	123,821,000	その他管理	22,046,000
施設収入	27,567,000	業務費	68,563,000
納付金収入	10,800,000	一般事業費	18,736,000
施設改修協力金収入	9,600,000	学生指導セミナー	10,896,000
施設改修協力金収入	56,100,000	普通セミナー	35,690,000
補助金等収入	11,477,000	国際プログラム	3,241,000
学術奨励金収入	9,779,000	固定資産取得支出	9,100,000
日本国際教育協会	1,698,000	繰入金支出	3,977,000
寄附金収入	500,000	20周年記念事業	2,100,000
寄附金収入	2,565,000	予備	1,000,000
寄附金収入	7,927,000		
寄附金収入	7,907,000		
積立預金取崩収入	9,509,000		
当期収入合計	267,967,000	当期支出合計	267,967,000
前期繰越収支差額	65,902,000	次期繰越収支差額	65,902,000
合計	333,869,000	合計	333,869,000

当委員会は二年毎の改選期を迎え、別記のように再任16名、新任3名でスタートすることになった。昭和61年・62年度委員の顔ぶれは別記のとおりである。

第1回は委員16名に、ハウス側から中川館長、飯田名誉館長、立野専務理事、企画室スタッフ3名が出席して開催された。

〈主な議事〉
 (1) 委員長の委嘱と副委員長の指名
 中川館長は広野良吉氏を前期に引き続いて委員長に委嘱し、同委員長は前期と同様に三輪公忠、山沢逸平の両氏を副委員長に指名し、すべて承認された。

(2) 第13回国際学生セミナーの企画について
 本年度から始まる新しいシリーズの共通テーマには、前期委員会で提案されていた「開かれた」日本・総点検が正式に選ばれ、シリーズ第1回のテーマは協議の結果「開かれた」とは何かとすることに決定した。なお運営委員にスティー、宇佐美、小野沢、深海、溝田、庄野の六氏を選出した。

(3) 第7回国際フォーラムについて
 外国人学者・ゲストについては、二、三の候補者が出され、今秋以降を予定して準備を進めることになった。

(4) 国際館 (International Lodge) の活用について
 目下建設のための募金が行われている国際館の活用について、有効な活用の可能性を検討していくことになった。

昭和61・62年度国際プログラム委員

(就任順、敬称略、○印は新任)

〈委員長〉
 広野良吉 成蹊大学教授

〈副委員長〉
 三輪公忠 上智大学国際関係研究所長
 山沢逸平 一橋大学教授

〈委員〉
 菊地 靖 早稲田大学教授
 熊田禎宣 東京工業大学教授
 庄野克房 上智大学教授
 中村英男 東京大学教授
 マリオン・ウイリアム・ステイール 国際基督教大学助教授

立川 明 国際基督教大学助教授
 長谷川三千子 埼玉大学助教授
 渡辺昭夫 東京大学教授
 勝谷祐一 日本学術振興会事業部長
 宇佐美滋 東京外国語大学教授
 雨宮 忠 文部省留学生課長

小松諄悦 国際交流基金受入課長
 溝田勉 国際連合児童基金駐日副代表
 ○小野沢正喜 筑波大学助教授
 ○竹田いさみ 独協大学講師
 ○深竹博明 慶応義塾大学教授

昭和61年度

第1回大学教員懇談会企画委員会

86年5月8日/私学会館

(出席者) 井早康正、小池生夫、根岸愛子、蠟山道雄、岩波一寛、佐藤保、絹川正吉、宮腰賢、石川孝夫、熊坂敦子、示

昭和60年度経常部収支計算書 (60.4.1~61.3.31)

1. 収支計算の部

収入の部		支出の部	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
基本財産運用収入	223,633	人件費	133,825,789
事業収入	164,998,707	法人諸費	1,392,368
宿舍収入	122,916,126	事務費	19,229,169
施設収入	31,131,823	土地建物費	20,647,769
納付金収入	10,950,758	事業費	61,962,436
施設改修協力金収入	9,324,400	一般事業費	19,147,117
協力会員校会費収入	56,100,000	普通セミナー	28,924,827
補助金等収入	11,803,000	学生指導セミナー	10,863,577
寄付金収入	1,118,585	国際プログラム	3,026,915
セミナー会費収入	2,751,380	固定資産取得支出	10,272,000
雑収入	10,273,227	繰入金支出	4,050,492
繰入金収入	8,050,492	20周年記念事業費	3,318,315
特定預金取崩収入	7,536,000	特定預金支出	2,050,000
		その他	20,000
前期繰越収支差額	51,640,644	支出合計	256,768,338
収入合計	323,820,068	次期繰越収支差額	67,051,730

2. 正味財産増減計算の部

増加の部		減少の部	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
資産増加額	12,342,000	資産減少額	26,480,293
負債減少額	7,536,000	引当金増加額	2,050,000
前期繰越増減差額	451,453,546	減少額合計	28,530,293
増加額合計	471,331,546	次期繰越増減差額	442,801,253

村悦二郎、杉山恭

(敬称略)

小池編集委員長より作業の中間報告が行われた。

◆ 新时期(昭和61・62年度)委員会は、別記のように9名の新任委員を迎え発足することになった。

第1回委員会は委員13名に、ハウス側から中川館長、立野専務理事、企画室スタッフ3名が出席して開催された。

杉山、示村の五氏を選出した。

〈主な議事〉
 (1) 委員長及び副委員長の選出
 前期に引き続いて委員長に井早康正氏、副委員長に小池生夫、岩波一寛両氏を選出された。

(2) 大学教員懇談会記録書編纂委員会の報告

昭和61・62年度大学教員懇談会企画委員

(就任順、敬称略、○印は新任)

委員長
 井早康正 電気通信大学教授
 (次頁3段目につづく)

千人会

'86年3月5日

現在会員一、五三七名(実会員数)

(通算入会者一、七七五名)

新しく会員となられた方々

9名(第83回報告(申込順))

C 日本分光工業(株) 大福 族生殿
C 東京都立小金井工業高校教諭

C 千葉大学教授 沢田 精二殿

A 杏林大学助教授 西澤 宗英殿

B 中央大学教授 飛田 茂雄殿

C 東京都立商科短期大学長 久留都茂子殿

C 帝京大学講師 村田 光二殿

C 愛知女子短期大学講師 松本 高志殿

A 東海大学助教授 綾野 克俊殿

△会費ありがとうございます

松井實夫、島美喜子、箕輪成男、久保亮五、

佐藤毅、西田貴子、五唐勝、梅村魁、福永寿

己夫、安藤英治、岡山猛、豊田陽子、人見宏、

一松信、藤木宏幸、彦由一太、永野賢、石堂

常世、手島修蔵、示村悦二郎、土井恵美子、

富塚文太郎、白川和雄、寺中良一、大西清、

石原忠男、麻島昭一、最上武雄、井岡昇、松

尾弘、山田良之助、木村建一、市川邦彦、若

林玄修、瀬部孝、井村君江、工藤英明、勝見

会員の現況

(昭和61年3月31日現在)

入会者数	1,767人
(物故者・退会者)	233人
実会員数	1,534人
(内訳)	
終身会員(一時払い10万円)	18人
A会員(年額 10,000円)	194
B会員(年額 5,000円)	468
C会員(年額 3,000円)	854

允行、柴田泰比古、小原啓義、森川八洲男、岡村絵吾、原一雄、熊坂敦子、森山ヨシ子、小幡史朗、海老沢義道、喜多村得也、太田淳一、小山五郎、内藤博一、河村フジ子、平澤薫、植藤敏治、渡辺武雄、萩原敏、丸山眞男、加藤六美、宮腰賢、尾田幸雄、護雅夫、尾田綾子、池田義人、村井実、齊藤幸一郎、内山正熊、西村閑也、鈴木一郎、大泉充郎、梶原豊福西基、鈴木友二、平野鉄太郎、小倉芳彦、田所光子、西勝、寺内礼治郎、春田素夫、向坊隆、永井道雄、村田晴夫、木村尚三郎、佐藤幸、富岡幸雄、石渡毅、池原義郎、渡利千波、大田未徳、石弘光、村田和己、秋間美佐野厚子、都留春夫、澤孝一郎、松澤通生、加藤寛、手塚喬介、館逸雄、小原孝一郎、井上百合子、金子靖、木田宏、浦野伊和子、原原芳男、高峯一愚、安藤賢一、佐藤和男、横田忠夫、鈴木達雄、塩田庄兵衛、添田育志、海老根宏、林邦夫、堤彪、藤井彌太郎、関根隆光、福田一、村田喜代治、矢野洋四朗、山澤逸平、伊藤意智郎、熊田陽一郎、羽田三郎、井上宇市、久保田浩、桐生富久、進藤正久、水野弘文、工藤康雄、江浩吉美、川藤下吉、清水昭次、藤井良治、伊倉退蔵、染谷恭次郎、狩野紀昭、前田愛、佐伯彰一、小川仁、羽田新、小谷友紀子、鈴木和子、佐藤経明、井上繁、山崎邦彦、堀野定雄、関口富左、下森定、竹内昭夫、小島香子、横山勝信、原治加藤秀俊、向山文雄、小原清成、舛刈照範、富山芳正、矢澤大二、正田亘、芳賀徹、村瀬興雄、梅沢文輔、峰岸純夫、小泉一郎、鈴木佛二、立川明、加藤一郎、阿久津喜弘、井早康正、小林保彦、荒井献、太田正孝、山之内靖、木原太郎、高橋三雄、伊藤嘉栄、芳野越夫、北野弘文、久留都茂子、中村英雄、野見山不二、関口忠、近藤正三、今井栄、原田敬一、内田祥哉、後藤捨男、細谷千博、楡田信男、馬場孝悦、崎田直次、本明寛、石川孝夫、大根盛一、岡田巳代次、澤島侑子、平野文孝、中島康孝、角田稔、鴨澤敏、高柳暎、千野熊男、近藤裕、山本幹夫、内田市五郎、椿弘次、野間三郎、高木健太郎、大村晴雄、一瀬智司、木村健二郎、原口隆英、下出積興、天城勲、佐野幹夫、小林弘政、阿部弘、国分久子、奥野忠一、本吉修二、徳永勇雄、朝洋一、柴垣和三雄、宮川彰、荒川有史、高瀬文志郎、林

△副委員長

小池生夫 慶応義塾大学教授
岩波一寛 中央大学教授

△委員

根岸愛子 東京女子大学教授
堀部政男 一橋大学教授
蠟山道雄 上智大学教授
佐藤 保 お茶の水女子大学教授
絹川正吉 国際基督教大学教授
宮腰 賢 東京学芸大学教授
石川孝夫 東京理科大学教授
尾形 憲 法政大学教授
熊坂敦子 日本女子大学教授
示村悦二郎 早稲田大学教授
神保信一 明治学院大学教授
杉山 恭 青山学院大学教授
原科幸彦 東京工業大学助教授
平木典子 立教大学カウンセラー
見田宗介 東京大学教授

昭和60年度 第3回共同セミナー委員会

'86年3月10日/私学会館

〔出席者〕岡宏子、富田登、尾本恵市、小浪充、江沢洋、戸沼幸市、深海博明、山下幸夫、青柳清孝、鈴木和子、竹内啓、卓男、奥山典生、大塚久雄、谷口汎邦、宗像元介 (敬称略)

◇千人会員からのたより◇

昨年3月末帰国して帰国ボケのままで無為に過ごしました。日本社会になじめないカルチャーショックです。日本での常識は、海外

中西進、合田周平、川端香男里、坂本百大 (敬称略)

△主な議事

(1) 昭和60年度年間プログラムの総括
教育プログラム参加状況を中心に、企画室長から総括報告があり、共同セミナー参加者の減少傾向をめぐって意見交換が行われた。広報活動の強化、社会人への開放の可能性、多様な学生の要求や意識の変化の把握などが話し合われた。
(2) 第138回共同セミナー(12月5日~6日)の企画について
国際平和年に因み、年内に「平和と軍縮(鴨委員)の企画を実現させること、意見の一致をみた。
(3) 第139回共同セミナー(87年3月13日~15日)の企画について
二、三のテーマ案が出され新年度委員会ですらに協議することになった。

◇ なお、岡委員長が3月で聖心女子大学を定年退職されるに伴い、委員も本年度限りで退任されるため、委員長在任10年に対して中川館長が謝意をのべ、花束を贈呈した。

◇ これは特殊。この逆もまた真。
中央大学教授 寺内礼二郎

◇ 定年まであとわずか五年、悔いのない日々を過ごすことを目指そうと、ほそかに期しています。
東京都立大学教授 秋間 実

業／務／通／信

'86年3・4・5月

花と新緑のキャンパスから

春は人生の折目、節目を迎える。今年もこの季節には、フレッシュマンの合宿あるいは新入社員研修など、この丘で多くの若者がさまざまな交わり、出会いを体験し、「一人立ち」への一歩をふみ出した。

●新入生合宿で延べ六、八〇〇人

4・5月中に実施された新入生セミナー

●フレッシュマン合宿に想う

山の形を崩さず、そのまま利用した自然の中のセミナー・ハウスがすくく良いと思っただ。山の中においを感じながら、一晩寝ずみんなと話し合っていた。セミナー・ハウスが一つの国で、私たちは一軒の家を持つ家主、自分の責任と、自分に任せられた自由の中に、ああ、大学生なんだな、という感じでした。(東京学芸大学・理科教育 永田あかね)

◇
一番強く印象に残ったことは、何と云ってもセミナー・ハウスの建て方です。最初は、「部屋にトイレも電話もないなんて、ひどい所」と思ったのですが、二泊して共同でトイレ・洗面所を使ううちに、何となくこのハウスの目的が何であるのかが分かってきました。どこへ行くにも必ず誰かと会うようになっていて、どうしても無言で通るわけにはいかないのです。挨拶こそが最も簡単で最も難しく、相互理解への第一歩なのだ、と分かって始めたのは、もう帰り仕度をしている時でした。(杏林大学保健学科 小川友美)



車中の笑顔——バスで退館する東京薬科大の新入生たち

(いわゆるオリエンテーション)でクラス単位以上の規模の合宿は、別表(14ページ)に示すとおりで、計四六件(二四校)、五、八九九人(うち教職員四八八人)、延べ六、七八三人(五四一人)である。これは両月の総延人数の五八%に当たる。なお、近年は教師と上級生の協同企画・運営で合宿の効果を上げているものが少なくない。同表では、参考までに、各合宿に参加した上級生の数(計五四六人、延べ六八〇人)を示した。

●新入生合宿、4・5月の話題から

4・5月中の実施件数は昨年同月(三九)に比べて七件多い。これはハウスから最も近距離にある協力会員校、東京薬科大が、初めて大学(教務)主催のクラス別ガイダンスを計七回(延べ五二六人)にわたって実施されたためである。毎回午前の授業終了後に到着、翌日は朝食後

次女が3月のセミナーに参加させていただき、大変お世話になりました。

立教大学教授 前田 愛

勤務先では地理的に隣人ですが、中々うかがう余裕がなくて残念です。

中央大学教授 佐伯彰一

◇
4月はじめ、桜の美しい季節に研究室恒例の春季課題論文発表会をさせて頂きました。ハウスのキャンパス内の多くの木々が春先の大雪のためでしょうか折れている姿に驚きました。特に立派な桜が根元から二つに裂けて倒れているのは痛ましい限りでした。セミナー・ハウスの森は訪れる人々の心の安らぎでもあるのだ、と改めて感じた次第です。

神奈川大学助教授 堀野定雄

◇
満七八歳になって感無量です。自愛しております。

早稲田大学名誉教授 鈴木悌二

◇
下界の学校ではじきとばされた子どもたちが、やがて希望の灯を見出す時のよろこびが生き甲斐です。

白根開善学校理事長 本吉修二

ハウスから「登校」、と地の利を生かしたの企画であった。

新入生が寄せた感想の中には、「雲の上」の存在だった先生と、合宿では人と人として接触ができた」ことを喜ぶものがある。大東・津田塾大、久留・都立商科短大、與良・都立立川短大、田中・白梅学園短大(6月にかけて実施)の各学長もフレッシュマンと親しい交わりをもたれた。うち大東学長は全三学科のフレッシュマン・キャンプで来館、久留、田中両学長はともに二回の合宿で新入生と起居をともにされた。

合宿のプログラム作りには、各校それぞれの工夫が見られる。二泊三日でゆと

千人会収支計算書

(昭和60年4月1日～昭和61年3月31日) (単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前期繰越収入	3,831,199	印刷製本費	48,575
会費	4,366,000	通信運搬費	762,594
雑収入	72,985	振替貯金手数料	41,310
		学生指導セミナー補助支出	4,000,000
		計	4,852,479
		次期繰越収支差額	3,417,705
合計	8,270,184	合計	8,270,184

りある日程には、学外からのゲストによる講演も組まれている。宇宙開発事業団宇宙実験搭乗員・内藤千秋さん(東海大医学部)や作家・山本茂実氏(文京女子短大英語英文学科)らが講師として来館。また文教大学女子短大英語英文科は中日午後、民家・遠来荘で英語による茶道紹介の実演を行った。

最多学科の実施校は今年も東京学芸大の六学科(教室)(計三七七名)であった。同大の「新入生合宿研修」は71年次以来連続の開催で、今年で一五年目。本号の「わたしたちの合宿」(別掲)では、生物学教室の藍尚禮教授(海外子女教育センター長)に「今、初心を想う時」の一文

昭和61年4・5月
新入生オリエンテーション実施状況

学 校 名	参 加 者 数
● 4 月	
東京薬科大 (新入生歓迎キャンプ)	* 224 (1) < 102 >
東海大・医学部	* 156 (17) < 32 >
杏林大・医学部	* 113 (11)
高津看護専門学校	77 (3) < 34 >
立教大・観光学科	152 (5) < 12 >
杏林大・保健学部	* 132 (5)
工学院大・工業化学科	158 (23)
駒沢大・仏教学部	216 (19)
東京都立商科短大・経営学科	109 (15) < 24 >
日本女子大・家政経済学科	78 (9)
学習院大・学生相談所	49 (5) < 18 >
東京コンピュータ専門学校	208 (19)
東京コンピュータ専門学校	241 (21)
中央大学・哲学科教育学専攻	61 (7) < 11 >
津田塾大・国際関係学科	316 (24) < 6 >
東京学芸大・幼稚園教員養成課程	36 (5) < 2 >
東京都立大・機械工学科	62 (6)
日本女子大・社会福祉学科	132 (9) < 10 >
慶応義塾大・国際センター (留学生)	101 (13) < 38 >
中央大・「心理学」会	67 < 43 >
● 5 月	
武蔵工業大・電子通信工学科	169 (16) < 23 >
東京都立商科短大・商学科	281 (26) < 34 >
津田塾大・英文学科	246 (18) < 13 >
東京学芸大・理科教育学教室	20 (2) < 2 >
東京学芸大・化学教室	50 (5) < 3 >
東京学芸大・物理学教室	51 (4) < 3 >
東京都立商科短大・商学科II部	125 (15) < 36 >
東京電機大・電子工学科	128 (4)
日本獣医畜産大・畜産学科	90 (15)
文京女子短大・英語英文学科	298 (11)
文京女子短大・英語英文学科	298 (12)
東京薬科大・薬学部 Eクラス	76 (7) < 4 >
東京薬科大・薬学部 Dクラス	75 (7) < 4 >
東京学芸大・生物学教室	48 (4) < 4 >
東京学芸大・数学教育学科	172 (10) < 9 >
東京薬科大・薬学部 Aクラス	72 (6) < 4 >
都立立川短大・家政学科, 食物学科	119 (26)
東京薬科大・薬学部 Bクラス	70 (6) < 4 >
東京薬科大・薬学部 Cクラス	81 (7) < 4 >
津田塾大・数学科	123 (17) < 4 >
東京都立大・物理学科	49 (6) < 13 >
東京都立大・化学科	82 (8) < 42 >
東京薬科大・薬学部 Gクラス	78 (6) < 4 >
東京薬科大・薬学部 Fクラス	74 (7) < 4 >
電気通信大・電子情報学科	77 (7)
文教大学女子短大部・英語英文科	* 259 (19)
計 46グループ	5,899人(488人)<546人>

(注) 参加者数の () 内は教職員、 < > 内は上級生で、ともに内数。*は2泊、他は1泊。実施順。
なお、6・7月実施分は次号に掲載。

文をお寄せいただいた。

● 新入生を歓迎して

例年のように、大学の枠をこえて新入生を暖かく迎えようとする光景が見られた。たとえば4月13日(日)の昼食時の食堂(六グループ・二四六名)では、立大観光学科の新入生グループが紹介され、たまたま来泊中のルソール合奏団の一六名がヘンデルの合奏協奏曲など二曲を演奏、歓迎の意を表した。また23日(水)の夕食時には大学(中大教育学専攻、看護学校(国立西埼玉中央病院)、企業久光製薬)——三つの「ブレッシユマン」グループが交流。また、遠来荘での月例茶会でも、日本女子大(社会福祉)、慶大国際センター(留学生)、東京都立大(物理・化学)の新入生らが、地元奉仕者からの歓待を受けた。

わたしたちの合宿

今、初心を想う時

東京学芸大学教授 藍 尚禮



「八王子ゼミ」。学生の間にどう呼ばれているか。新入生オリエンテーションは、毎年「判」で押したように5月中旬に実施されている。

私の着任が73年4月で、同年5月には八王子の丘で担任の新入生とともに、ブレッシユな生活を味わったことを憶えている。以来、在外研修の出張で不参加となった83年を除くと、今年で一三年間連続してこの定例行事に参加してきたことになる。

その間、年々歳々花相似たり。が、歳々新年々学生は同じとはゆかず、私は昨今、実はひそかに「八王子ゼミ」が死語にな

りはせぬか、と危惧しているのである。生活は貧しくとも心は豊かに。それは私達の青春時代の合言葉で、「学生」であることに誇りと責任を身につけていたように思う。それに比べて、高校の出口の扉を開いたら大学の入口の扉がそこにあった、という時代であれば、今の若者たちにとって大学の生活は人生の寄り道程度なのだろうか。そう思うと、ふと従来どおりの一泊二日の「八王子ゼミ」が、新入生にもたらす体験とはいったい何なのだろうか、と思わずにはおられない。

事前準備として、教室会議でゼミの内容を討議し、教室間連絡会で相互に実施計画を考え、さらに全体会ではセミナー・ハウスのでの生活の在り方をガイドする。合宿の当日には、例年、教員一人ひとりが研究課題を話し、在外研究の紹介もする。学生一人ひとりの自己紹介があり、特技の披露では思わぬプロフィールを見せられることもある。そこには大学の教室では得られぬ交流がある。無為無策であったというのではない。しかし、である。「豊かな社会」の中の今の若者の感性の急速な変化には、正直私達大学の意識が追いついてゆけない。かといって、ただ情性に逃げこむことも許されない。「八王子ゼミ」の在り方を、もう一度初心に戻って、根本的に考えてみる機会、それが今かもしれない。大学セミナー・ハウスには、新しい出会いによる自己発見を可能にするものがある。私はそのことを限りなく貴重に思う。それを最大限活かせるような合宿研修、それは如何にあるべきか。一三年前初めてこの丘で生活した時の若者一人ひとりの目の輝きを思い出しながら、今そう思うのである。

予 告

第137回大学共同セミナー

主題 生命倫理を考える
 期日 1986年11月14～16日(金～日)
 募集人員 70名(社会人も可)

◇講義とシンポジウム

現代の科学技術と医療——臓器移植、遺伝子組み替え、脳死をめぐる
 東京大学医用電子施設教授 古川俊行氏
 東京大学医学部教授 村松正美氏
 千葉大学文学部教授 加藤尚武氏
 明治大学法学部助教授 新美育文氏
 電気通信大学教授 合田周平氏
 青山学院大学経済学部教授 坂本百大氏

第13回国際学生セミナー

主題 <開かれた>日本・総点検
 ——<開かれた>とは何か——
 期日 1986年10月24～26日(金～日)
 募集人員 約80名(内外国大学生20名)

◇セクション演習

- A. 国民国家の行方
 早稲田大学社会科学部教授 大島英樹氏
 国際基督教大学教養学部助教授 マリオンスティール氏
- B. 開放経済体制のコスト・ベネフィット
 学習院大学経済学部教授 島野貞爾氏
- C. 日本社会は異質性をどこまで受容できるか
 福岡教育大学教育学部教授 江洲一公氏
 オーストラリア国立大学豪日研究センター
 研究生 コリン・マッケンジー氏
- D. 日本の科学技術——その成果と限界——
 高エネルギー物理研助手 桂 共太郎氏
 マサチューセッツ工科大学準教授 シャロン・トラウイーク氏

第23回大学教員懇談会

主題 大学教育の充実と個性化
 ——臨教審第二次答申をめぐる——
 期日 1986年10月4～5日(土～日)

◇発題講演

名古屋大学学長・臨教審第4部会長 飯島宗一氏

◇パネル——学部における専門教育を考える——
 東京工業大学名誉教授・沼津工業高等専門学校校長 慶伊富長氏
 筑波大学哲学・思想系教授 井門富二夫氏
 京都大学経済学部教授 伊東光晴氏
 オプザバー 文部省高等教育局長 大崎仁氏

◇問い合わせ先＝企画室☎0426-8532(直通)

芝浦工業大学電子計算機研究会
 中央大学教授 滝田 賢治
 学習院大シエイクスピア劇研究会*
 東京都立短期大学商学科新入生
 歓迎セミナー
 津田塾大学英文学科フレッシュマ
 ン・キャンパス
 東京学芸大学理科教育教室新入生合
 宿研修
 東京学芸大学化学教室新入生合宿
 東京学芸大学物理学教室新入生合宿
 青山学院大学青山子ども会
 東京都立商科短期大学商学科II部新
 入生歓迎セミナー
 立教大学助教 中江幸雄
 東京電機大学電子工学科新入生オリ
 エンテーション 馬場 宣良
 東京農業大学保志ゼミ・堀口ゼミ
 文京女子短期大学英語英文学科新入
 生オリエンテーション*
 東京薬科大学薬学部新入生ガイダン
 ス*****

芝浦工業大学教授 高橋 清
 東京工業大学教授 伊賀 健一
 中央大学児童文学研究会
 東京学芸大学生物学科新入生合宿
 東京学芸大学教育学科新入生合
 宿
 慶応義塾大学助教 森 康彦
 東京理科大学教授 狩野 正昭
 駒沢大学助教* 谷 功
 青山学院大学講師 富田 三光
 東京都立大学遺伝ゼミ 富澤 稔
 東京理科大学教授 三戸 公
 立教大学教授 下斗米伸夫
 東京都立立川短期大学新入生歓迎セ
 ミナー
 成蹊大学教授 津田塾大学数学科フレッシュマン・
 キャンパス
 東京都立大学物理学科新入生オリエ
 ンテーション 坂元 忠芳
 東京都立大学化学科新入生歓迎セミ
 ナー 高窪 利一
 中央大学教授

東京工業大学助教 宮嶋 勝
 東京都立大学教授 山住 正己
 青山学院大学教授 佐藤 和男
 駒沢大学助教 瀬戸岡 純
 明星大学講師 山口 光
 電気通信大学電子情報学科新入生合
 宿研修
 中央大学昼間部経済学部ゼミナール
 連合会
 文教大学女子短期大学部英文学科フ
 レッシュメン・セミナー
 玉川大学教授 若槻 泰雄
 ルーテル神学大学ルター・セミナー
 日本獣医畜産大学畜産学科新入生オ
 リエンテーション
 桜美林大学短期大学体育文化団体連
 合会
 阿佐ヶ谷美術専門学校
 創価大学中野・中西・村瀬ゼミ
 長岡技術科学大助教 柳 和久
 桜美林大学教授 相馬 順一
 日本学生経済ゼミナール 東京都部
 第136回大学共同セミナー
 政治経済史学会

講堂にクーラーが入りました

野猿峠への路線バスも大半が冷房化——そのような時代です。利用者の要望も年々高まり、ハウスも、昨年は長期セミナー館の胡堂セミナー室と大セミナー室、そして今年はいよいよ講堂の冷房化に踏みきました。

これですべての研修室のクーラー計画が完了。猛暑の中での研修の効果も上ることでしょう。なお、本館ゲスト・ルームにも、教師館同様、クーラーが入りました。(ただし、気候によっては、この丘のすばらしい涼風も、お忘れなく！)

編集後記

本号を手にした方は、表紙の写真に、しばし目をとめて下さるのではないだろうか。東京学芸大学理科教育教室の新入生合宿の一コマです。新緑から青葉へと移りゆく多摩の丘の雑木林を、カメラでお見せできないのがとても残念ですが、キャンパスの中で体験できる、思わぬ発見が、見る側にも伝わってくるようです。そこで編集者からのお願いです。表紙用にゼミ合宿のスナップをご提供下さい。写真版「わたしたちの合宿」が綴られました。本号の記事は、新旧年度にまたがっているため、白書や決算報告、新委員会の活動状況、各大学のオリエンテーションの模様など、盛りだくさんになりました。(能)

表紙の写真は雑木林の中のバードウォッチング——東京学芸大学理科教育教室の新入生たち